

思ふままの記

樋口哲雄

凡そ人の世に於ては、人生を度外視してはそこに存在の理由は無いのである。そしてこの人生の政治、經濟、教育、藝術、宗教其他あらゆる時事問題の開展の中に眞實に人生を生かすべき哲學が潜在してゐる。就中宗教の價値が其あらゆる問題の中樞を占めてゐる事は何人も認識してゐる所である。さればこそ宗教的文藝なるものが、人類社會のものたる以上、それが創造の人生に於ける意義も價値も容易に首肯される譯である。故に文藝が人類生活に價値ある爲には吾々の生活を生かし吾々の生命を充實せしめ、所謂吾々の眞理追求への一個の暗示でなければならぬ。血の通つた人間生活に於ては單に抽象的に倫理哲學の世界のみでは生活は出來得ない、聖人賢人と雖も生ける人間である限り、絶對に悲哀なしとはいへない、人間生活に於ける善惡の分岐点は喜怒哀樂を如何に取扱ふかに基順するのである。人間は絶對に善い事のみを行ふ事は不可能である。故に吾々は喜怒哀樂の處置について動もすれば全体的に合理化する事が出來ず、部分的な處置を取つて満足するのである。少なくとも吾人にとつては體驗を外へ擴げるのみならず、内へ深めて行く事が最大の急務である。即其煩悶其體驗を合理化の生活へ進めねばならない。それが所謂人生生活に具体化された善で眞の藝術の世界も其中に

見出さなければならぬと思ふ。

倫理哲學は生活のバックとなり基礎となり人生の行路を決定するものである。これに比して藝術の世界に於ては人生のありのまゝを完全に表現してゐる。各々は東西を向くのみでは人生に生きて行く事は不可能である。東西を向いて何をするかそこに人生の深みを必要とする様になる。宗教は實に人生に深さをあたえ、哲學、倫理、文藝の不足を補ふものである。只單に文藝作品を娛樂慰安の爲に讀む人々は眞實に藝術を鑑賞する資格のない人である。作品中に於ける哀愁に對しては斷片的に肯定し、其人物に同情しそれによつて快樂を感ずるといふことは、あり得るが、そのみであつてはならない。そこには部分的な生命の満足はあつても統一的な人生を生す所の満足は到底出來ない。

人間の不完全なる性情は、完全の世界を理想する、それは倫理哲學上の洗禮を受け、さらに文藝的優美を加へ、なほその上に宗教の深さを盛り、それが吾々の上に具象されたものでなければならぬ。佛教に於ける法華經の一々の文字が釋迦佛であると言ふ思想も此の如く哲學的、宗教的、文藝的の一切の意味が一致して現れた尊さからである。表面裝飾を以て綴られた經典には何等價值はない。其中に織りなされてゐる思想そのものに尊さがある。

日蓮聖人が示された教は表面の價值争闘の錯綜と見るといふ迷に就て深く戒め、表面に顯れた物質

其のものは價値ではない、それは使用によりて初めて價値づけられるといつて居られる。黄金と石との比較は成立しない、何となれば時と場合によりて一般の原則は破れるであろう、さればそこに人生があり、生活があるのである。吾人の理想的人生とは實に現實の相、即價値創造への道である。

宗祖の法華經流布の生涯は實に劇的であつた、宗祖の眼に映じた社會現相其ものは一つのドラマであり、法華經は丁度脚本の如く佛陀は舞台監督の如くであつた。而して宗祖自身は或場合にはこの劇中に於いて獨占的の俳優を勤め、又或る場合には觀覽席より演劇に對して鑑賞する第三者の地位にあつて正當の批評を下しつゝ其現實の血と涙とによりて人類永劫の爲に法華經の尊さ、及び價値意義を示されたのである。(完)

微かなる者の信仰

大 澤 惠 宏

人間はその本性として、現在の自分より、よりよき自分を見出さんため絶えざる努力を惜しまない。人間の歴史はそれを具体的に物語つてゐる。